

『フライアゲイン』 作…岩本憲嗣

■あらすじ

河井純一はあの日の過ちを忘れられずにいた。  
高校野球地方大会決勝戦。自身の落球でチームの夢は破れ、無二  
の親友・畑山の将来をも壊してしまった。

あれから18年。プロへは進めず厳しい生活を送る畑山。けれど昔と変わらずいつも笑っ  
ている彼を河井は理解が出来なかった。

そんなある日、河井は少年野球を観戦中にあの日と同じ感覚に襲われる。空高く舞い上  
がるフライ。思わず目を背けた時に聴こえたのは何故か畑山の声であった。

■登場人物

河井純一（かわいじゅんいち・34歳・会社員）

畑山満（はたやまみつる・34歳・純一の同級生）

河井麻子（かわいあさこ・34歳・純一の妻）

河井拓也（かわいたくや・8歳・純一の子）

アナウンサー

友人1

友人2

SE 高校野球地方大会決勝の球場の喧騒。

河井M「なあ、未だに夢に見るんだよ。あれからもう18年だつてのにさ」

アナ「9回2アウト満塁。打席4番島本。一打出れば逆転サヨナラ。対する吉祥寺北は抑え  
れば初の甲子園出場が決まります。1年生エース畑山、ここが正念場だが……」

SE 打球の音。

アナ「打った！！大き当たり！……しかしこれは届かないか？センター河井がグラブを構  
える……」

河井M「何てことないフライだった。これを捕れば俺は……俺たちは……なのに」

SE 辺りを包む歓声と悲鳴。

アナ「落球！？センター河井落とした！！」

河井M「俺は……俺は……」

SE 居酒屋の喧騒。

畑山「河井？おい河井！？」

河井「え？ああ悪い」

畑山「何だよ、もう酔いつぶれたか？」

河井「いや、まだ大丈夫だ。もっと呑もう。畑山と会うのも久しぶりだしな」

畑山「だな。とりあえず忘れない内にこれ」

河井「封筒？」

畑山「前に借りてた5万。会社畳んで厳しかった時にお前が無理矢理渡してきたろ」

河井「ああ……あったなそんなこと」

畑山「でも正直助かった。ありがとな」

河井「別に俺は……それより今は仕事は……」

畑山「知り合いに紹介して貰ってなんとか。先月引越しも終わってやっと落ち着いたわ。

しかし何だ、これだけ失敗も続きやそろそろいいことがあってもいいよな。はははは」

河井「いいことか……」

畑山「例えばこの歳にしてプロにスカウトされるとか」

河井「畑山……」

畑山「なんだよそのツラ。結構本気だぞ。人生なんて野球と同じだ。追い込まれても一打逆転サヨナラがあるかもしれないってな。はははは」

河井「……ごめん」

畑山「そうだ、野球で思い出したわ。ドームのチケット貰ったんだけど、ちいっと家の都合でこの日行けないんだわ。よければ使ってくれ……」

河井「いや……悪い。俺も用事があるんだ」

畑山「じゃあ仕方ねえな。お？もうグラス空じゃねえか。ほら呑もうぜ。はははは」

河井M「お前はいつもそうだよな。そうやって笑ってられる。どうしてなんだ、だってお前の人生を無茶苦茶にしちまったのは俺じゃないかよ。あの時に全部」

SE 球場の喧騒。

畑山「河井？おい河井大丈夫か？」

河井「畑山……俺……俺……落とした……俺が……ごめん」

畑山「馬鹿、謝るのは先輩にだろ。俺らには来年も再来年もある。ほら行こうぜ」

河井「うわっ！」

河井M「笑いながら言ったその言葉は結局は実現することはなかった。翌年のチームは先輩

たちの穴を埋めることが出来ず大幅に戦力ダウン。畑山はエースとして孤軍奮闘したが、その無理がたたり肩を故障。その年を棒に振る。翌年、怪我から復帰した畑山からは元の球威は陰を潜め……かつては将来のドラフトの目玉だと多くのスカウトから注目を集めていたもののやがて見向きもされなくなり……」

畑山「ひでえよな、てつきり卒業後はプロ行きだと思ってたのにさ。本当、野球と一緒になかなか上手くいかねえ。ははははは」

河井M「なのにお前は笑ってた」

SE 勢いよく布団を剥ぎ取る音。

麻子「ちよっと！？休みだからっていつまで寝てるつもり！？」

河井「え？……今何時？」

麻子「もう14時。お昼ごはんないからね」

河井「そうか……昨日飲み過ぎて……飯はいいよ。何か飲みもの」

SE 階段を降りる音。

河井M「遅く起きた土曜の朝……いやもう昼だ。一日酔いで痛む頭を押えながらリビングまでやってくる一人息子の拓也がまた野球を見ていた」

拓也「あ、パパ。おは……おそよう」

河井「おそよう。珍しい家にいるなんて」

拓也「もうすぐ練習に行くよ。島本の打席見てから……あああああ！！！」

河井「うるさい。パパは頭が痛……」

拓也「見て見てホームラン！島本カッケェ！」

麻子「知ってた？パパ昔島本からヒット打ったことあるのよ」

拓也「え？」

麻子「高校時代ピッチャーだった島本からね。あれ確か高一の時だっけ？」

河井「またそんな昔の話を蒸し返して……覚えてない」

拓也「本当！？すげえ！パパすげえ！あ！だったら俺らのチームのコーチやってよ。隣町のチーム最近監督が変わってから滅茶苦茶強くて困ってんだよ。お願い！！」

SE ドアチャイムの音。

友人1「拓也くーん！？」

友人2 「練習一緒に行こうぜえ!!」

拓也 「今行く!じゃあ。パパ、考えといてね!」

SE 拓也がドタバタと去る音。

河井 「本当騒がしい奴だな」

麻子 「どうするの?やったらどう?コーチ」

河井 「やらない。俺は野球はもうやらないの」

麻子 「何で?飲み歩くよりずっと健康的な趣味なのに」

河井 「昨日遅かったの怒ってるワケ?」

麻子 「まあ少し」

河井 「仕方ないだろ。昨日はほら……久しぶりに畑山と呑んでたんだけ」

麻子 「畑山君と?言ってくれたら私も行った

のに」

河井 「お前は来なくていい」

麻子 「何その言い方。昔畑山君のこと好きだったからって妬いてるわけ?」

河井 「そうじゃなくて……その逆。アイツはさ……もうエースで4番のアイツじゃないんだ

よ。結局プロからは声がかからなくて、全然違う仕事を転々として、金が少し

貯まったと思えば事業に手を出して失敗してさ……おかしいよな。あの島本を完

璧に抑えてたアイツがなんでこんな……」

麻子 「それは……」

河井 「全部俺のせいだ。俺がフライを捕ってればアイツの人生変わってた」

麻子 「……明日河川敷であの子試合あるんだって。観に行つてあげてよ」

河井 「人の話聞いてたか。俺は野球は……」

麻子 「やらない。けど観ないなんて言つてなかったでしょ」

河井 「大体観てどうなるんだよ」

麻子 「どうって……結構面白いわよ。昔のあなた見てるみたい」

河井 「何だそりゃ」

SE 河川敷の喧騒。遠くで陸橋を電車の走る音が聴こえる。

河井M 「結局俺は麻子に言いくるめられて拓也の試合を見に来るはめになった。しかし休日の河川敷ってのはこんなに人が多いものなのか。野球の他にも様々なスポーツを楽しんでいる人たちが溢れている」

河井 「拓也の試合ってのは……ああ、そこか」

SE 野球をする子供たちの喧騒。「いけー」「打てー」などの元気のいい声が聴こえる。

河井M 「土手に腰を降ろし子供たちの試合を遠巻きに見やる」

河井「スコアは……3-0で負けてるのか。にしても敵のピッチャー上手い子だな……あのフォーム……畑山みたいだ」

SE ボールを打つ音。

拓也「行ったぞ！センターよく見て！！」

SE 拍手の音。湧き上がるベンチ。

河井M 「拍手の音で打球がきちんと捕球されたのだと気づく。ダメだ。フライが上がるとどうしても目を逸らしてしまう」

河井「ん？拓也の打席か」

SE ボールが続けてミットに叩きこまれる音。

河井「アイツ生意気にボール選んでやがる。一発狙ってるな」

SE ボールを打つ音。

河井M 「拓也が打った！当たりは大きい！けれど打球は大きく右に逸れて……こっちに飛んで来た！？高く舞い上がるボール。俺はまた目を背けてしまう。ダメだ、あの時を思い出す。見てられないんだ」

畑山「おい！ボール行ったぞ！しっかり見ろ！！」

河井M 「この声？驚く俺の視界に真っ白なボールが落下してくる」

河井「あ……あ……」

SE 辺りに拍手の音。

河井「え？……俺……ボールを捕ってる？」

拓也「打球行っちゃってスマセンでした！

……って、パパ！？何でいるの？」

畑山「何だ、この子河井の倅だったのか」

河井「畑山……お前どうして……」

拓也「え？この人隣町のチームの監督だよ」

畑山「お前も子煩悩だな。ドームチケット断ってこつち観に来たってワケか？」

河井「お前何で少年野球の監督なんて……」

畑山「え？ウチのガキのチームだから。それにさ……俺野球好きなんだよ。はははは」

河井「そうか……」

畑山「そうかじゃねえよ。ほら行くぞ！」

河井「うわっ」

河井M「腕を引かれ立ち上がる。あの時と同じ感覚。それに同じ笑顔」

畑山「はははは、太ったろお前？」

河井「お前……本当いつも笑ってるよな」

畑山「当たり前だろ。野球やってりゃそれだけで楽しい。んなのお前だって知ってるんだろ。

来いよ、勝負だ」

拓也「ひよっとしてコーチしてくれるの？今負けてるんだよ、どうしよう……」

河井「そうか……でも大丈夫だ。野球は追い込まれても一打逆転がある……だよな」

畑山「ああ。分かってんじゃねえか」

SE 二人を子供たちの歓声が迎える。

### ※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての変更などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba127@hotmail.com) までメール一報頂きますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

### ※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキヤスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

[sunba1227@hotmail.com](mailto:sunba1227@hotmail.com) (岩本)